

ねこの みこの

猫養函信

第 5 1 号
平成 十 五 年
(2 0 0 3)
4 月 1 5 日 発行
(年 4 回 行)

猫養会会長に就くにあたつて

青木 秀樹

この新春、東明雅先生は猫養会会長を引退されることを表明され、私が会長職に就くことになった。もとより浅学非才、その上不勉強でなまけものの私には重すぎる職責である。明雅先生が創設された猫養会はこの四月で二十二年目を迎え、会員数も一八〇名と連句結社としては大きな組織に発展している。先生から理論・実作の教えを受け、会員が切磋琢磨しながら作り上げてきた「猫養の連句」を継承し発展させること、並びに会員が連句を楽しみながら創作活動を通して相互に研鑽する場として、猫養会を存続させることを多くの会員が望んでいる。幸い明雅先生は会長職を引退され「楽隠居」をされても、俳諧師として健在であり、理論面でも技術面でもよき指導者であることには変わりはない。そのような状況のもとで、会のまとめ役として会長職をお引き受けした次第である。理事・運営委員には実務型のメンバーをお願い

し、集団で会の運営を行うことにした。猫養会のこれからの最大の課題は、「猫養の連句」の指導体制である。新しい会員の中には明雅先生から直接指導を受けたことのないものも増えており、「猫養の連句」の基本をしつかり指導することが重要である。明雅先生から立机の免状を交付された方々をはじめベテランの方々には指導面のご協力を願いたい。

ところで、猫養の連句は基本がしつかりとしており、式目に通じているが、定型化していて面白くないと言う批判を聞く。連句が創作活動であることを忘れていくわけではなからう。ただ、ここはこうするものとの思い込みが染み付いて、マンネリ化している傾向が一部にあることは反省すべき点であろう。連句はもつと自由なものである。新しいメンバーの新しい発想を、式目に通じたベテランが上手く捌くことで、新しい現代的な連句作品が生まれていることに注目したい。連句は集団による「世態人情諷交詩」の創作活動である。前句をしつかり読み、いかに付けの発想をするかが連句実作の楽しみであり、またむずかしい点でもある。「変化させる」ことを心がけていければ、式目は後からついて来るものである。

連句の文学性が①一句一句のおもしろさ、②前句と付句との付心、付味のおもしろさ、③三句目の転じのおもしろさ、④一卷全体の

序・破・急のおもしろさにあることは、明雅先生がかねがね述べておられることである。

先生はまた、「一句の表現について、俳句ならば新しく深みがあつて、表現がすばらしいものがよいにきまつている。それに俳味やあわれ・しおりがあれば絶対であろう。しかし連句では必ずそのような句が絶対によいとは言えない。何故ならば、そのような句ばかりが五句も六句も続いたら、一本調子で一卷のおもしろさが無くなつてしまうからである。」「そのような場合、何でもない軽い遣句・通句が気分を一転する重要な役割を果たすのである。」「連句の中の名句か否かは流れの中でその価値を判断しなければならぬい。」とも述べられている。(『季刊連句』第2号掲載「私の連句採点法」より抜粋)

ようするに、連句実作の基本は付けと転じにあり、作品の評価は一卷の序・破・急のリズムと構成によるものであることが分かる。新しい連句創作のためには、もう一度原点に帰つて学び直すことも必要ではないだろうか。とはいえ、芭蕉七部集で、蕉風の付け合いを学ぶことは結構なことであるが、芭蕉の時代の句そのものを真似てみたつてしようがない。連句は現代の社会を映すものだからである。「猫養の連句」を継承するために、初心の方には連句の基本をしつかり身につけることを、中堅の方には一卷の流れの中の付け・転じの発想を磨いてほしいと思う。

白駒の隙を： 加藤 慶二

東明雅先生が猫養会会長を退かれる由承りました。先生のご教導をうけました門下生として心からお礼申しあげます。先生は蕉風伊勢派の俳諧を師根津芦丈から受け継ぎ、子規の「連句非文芸論」などもあつて、昭和三十年代衰微の極に達した文芸を、ご研究も西鶴から芭蕉へと移し、俳諧の伝統継承にすべてを傾注されました。『冬の日』『五歌仙が芭蕉俳諧の起点であれば、ご高著『夏の日』（角川書店昭・四七年）の「五歌仙」が昭和・平成連句の起点となつたのです。

先生に初めてお目にかかつたのは、今からおよそ四十年前、赴任するとき西鶴研究家の方から、「信大には『永代蔵』（岩波書店昭・三一年）校訂の東先生がおられる」と伺い、県町の図書分館長室へ緊張して訪ねましたが、先生は静かに微笑みながら『冬の日』の話をしてくださいました。私がまだ二十八歳のときです。

当時、助手は週に二日の出講と月一度の定例教授会、あとはもっぱら研究室で勉強をしていけばよく、私は学生としばしば山へ出かけておりました。そんな私に先生は教育・研究に従事する者は如何にあるべきかという姿勢を常に示してくださいました。教授会では頭をやや前にさげ右手をまつすぐ挙げて発言を求め、たとえ少数派の場合でも、いつも正

論でした。濃紺の背広の先生が左肩をいくらか落し、ヒマラヤ杉から洩れる夕陽の中を分館室へ戻られる姿は、古き良き時代のひとこまでもありました。

昭和四十年代前半、ベルリン自由大学の学生運動は東大青医連へ波及し、全国各地で大学紛争の凄まじい闘争が起きました。信大人文学部も校舎は占拠され、学生は自治会派と共闘派に分裂し対立、投石、放水、機動隊も出動してきました。学部長は過労で倒れ、先生が学部長事務取扱に選出されました。ある日、先生は学生に囲まれて講堂へ拉致され、大衆団交の矢面に立たされましたが、彼等の要求には屈しませんでした。私は若手教官として宿直室に泊り、両派の動向を報告する役目でした。しかし、双方の学生は教室で私の受講生でもありました。日誌には両派對立の詳細な文章を書くことができず、ノートにただ一行、

短夜や短き布団浅き夢

と認め提出。翌日、学部長室からの呼び出しがありました。かみなりのお叱りが落ちると覚悟し出頭しましたが、「ごころうさま」と先生の破顔一笑、日誌を広げて、拙句を訂正してくださいました。両派については何も触れず、「連句をしてみませんか」と誘ってくださったのです。朝夕の肌寒さを感じ始めた九月下旬、紛争は潮が引くようにあつさり収まりました。

私は信大連句会の一員となり、俳諧を通して各層の方と知り合いになりました。池田魚魯、宮坂静生、細田高夷、高橋玄一郎、小出きよみ、野村牛耳、清水瓢左、杉内徒司などの各氏、そしてある時は松代へ、また諏訪湖畔の久保寺へと連句三昧。大会できよみさんが捌くとあれば、元町の先生の書齋で毎日曜日、午前と午後を通しての特訓。私は俳諧の勉強もさることながら、きよみさんのおやきが愉しみでもありました。桃の咲く美しい季節、松代での連句大会へ連衆の方を車に乗せて修那羅峠を越えました。途中、玄一郎さんが車に酔い、峠の薬屋で私が酔いどめの薬を買って差し上げたなら気分爽快になられた由。それは、つわりの薬でした。先生とは砂金採り、魚釣り、思い出は尽きません。

やがて私は二年間、ボン大学日本学科へ勤務することになり、かたわらゲーテ研究の機会が与えられました。滞独中、明雅先生の通信指導を受け、ツァンハルト教授と日独両語の連句両吟を試みました。帰国が近づくと頃、先生ご夫妻と八月にハイデルベルクでお会いし、この一卷へ句いの花をいただきました。

蓬髪に落花一片驕旅の果て 明雅

いとしのボンよ春の朝よ K

(独語省略)

九月に私は日本へ帰り、十月に松本を去りました。明雅先生と過ごした十二年余は夢のまた夢か、ありがとうございます。

初懐紙源心作品集

平成十五年一月十二日興行
於 ホテルサンルート東京

「旅人の」 市野沢 弘子 捌

旅人の己をたのむ恵方かな 弘子
 謡初なる声通る路地 わこ
 磨かれし檜柱の艶やかに 慶子
 使ひ慣れたる碗で一服 直子
 月射せる露台将棋に胡坐して ゆみを
 水上スキー息の合ひたる 富美
 見ないふりしてはちらちら目で犯し 慶
 富士はまつたき裾を引きたり を
 ベレー帽かぶる少年画架へ向き 美
 青の時代の大好きな青 こ
 旬の魚肴に交はず酒うまく 直
 何も残さぬことを粹とし 慶
 仁王門くぐりて浴びる花吹雪 美
 殿様蛙睨め回す面 を
 春泥をつけたる象の鼻長く こ
 ゴルフ保険は常に掛け捨て 慶
 高分子化学を終の業と決め を
 不況の冬にはやる占 直
 出前持ち年越しそばは今出ます こ
 遊びのはずがいつか深みに 慶
 碧い目の恨み舌鋒太刀打てず を
 シャンゼリーゼに秋風の吹く 直

篠笛の音高らかに三日の月

大道芸は団栗の下 美
 つらつらと世紀のゆくへ来しかたと を
 堪忍袋切れる寸前 直
 花満ちて五稜郭跡著くなり 弘
 点となつたる風船の束 こ
 連衆 横山わこ 由川慶子 福井直子
 青島ゆみを 村田富美

「江戸開府」 梅田 利子 捌

江戸開府四百年や今日の春 利子
 繭玉飾る仕舞屋の軒 啓子
 和やかに料理教室パイ焼けて 香
 会計の役みんな遠慮し 渥子
 銭亀の並びし月の心字池 豊美
 妓が三味を弾く納涼の舟 渥
 ひと目惚れ君を攫ひて逃避行 啓
 ルクソール神殿砂嵐吹く 香
 ピレネーの嶺岷岷として鳩レース 利
 先物売の主は誰やら 啓
 だまし絵と解つてゐても騙される 香
 隣の家には双児誕生 渥
 気心の知れて地酒の花の宴 香
 蜂飼人の訛り懐かし 豊
 風光る髪逆立てて広目天 渥
 侵略シナリオ既にととのふ 啓
 密談は蕎麦屋の二階予約する 豊

寒の牡丹は薦被りして

白足袋の白さ眼にしむ夕灯り 渥
 恋の口説はオペラもどきで 豊
 ポッターの杖の一振り思ふまま 香
 泣きもしないでぶらり養虫 同
 月高く鍵束腰に警備員 啓
 ねぶたの跳人らつせらつせと 豊
 掌にとんとんと切る絹豆腐 香
 村に届きし大漁の報 豊
 「源心」の花は見事に咲きにけり 利
 猫喉鳴らすうらなる午後 渥
 連衆 小池啓子 若松香
 稲垣渥子 高橋豊美

「初鏡」

倉本 路子 捌

皺の顔またよからずや初鏡 路子
 伝授されたる雑煮一椀 恭子
 メールマンバイクを降りてにこやかに志世子 恭子
 いたづら鴉せつせつせと 鐵男
 中天に白き昼月雲の峰 渥子
 夏草刈りつ唄ふ牧童 渥子
 絶対と嘘ではじまる恋の道 敬子
 優男でも役にたちます 恭
 蛍光灯消えて点つて又消えて 渥
 不思議な国へ迷ひ込む猫 渥
 右左みながら揚げる軍艦旗 恭
 島影遠くスケッチのすら 渥

旅役者見栄さる肩に花吹雪

恭

四月大根育つ菜園

敬

朝寝して浅き夢見る気楽さよ

恭

紅茶に砂糖たつぷりと入れ

淳

熱心に寂聴源氏読む会へ

世

嵯峨野に散れる紅葉幾片

淳

行き会へるラガーマンみな遅しく

世

息つまる程抱かれしとき

淳

超好きと言はれてみたい不惑なり

路

思ひを乗せて流す灯籠

世

たわわなる葡萄畑に昇る月

敬

蜻蛉の止まる軒の表札

恭

キツチンの母の愛唱ローレライ

敬

温泉掘って村起しする

男

誰彼を誘ひこんでる花見酒

路

朧の山に舞へる妖精

世

連衆 式田恭子 秋山志世子

林鐵男 上月淳子 須賀敬子

「初富士に」 近藤 守男 捌

初富士に小手を翳すや梯子乗り

守男

鷗群れ飛ぶ新年の川

了齋

しつらへし句座に馴染みのにこやかに

景翠

砂時計落ち紅茶飲み頃

昌子

網戸越し肘枕して宵の月

芳梅

眺去らぬ素足白々

齋

繁々と伯爵夫人恋の徑

翠

長江ダムに沈む景観

昌

旅続く水面の雲とタマちゃん

齋

電子辞典を新型に代へ

梅

時ならぬ声に驚く奥書院

齋

一気呵成に漢山の筆

梅

憂き人も浮かれし人も花の下

昌

翅を休めて夢を見る蝶

翠

遍路へと発つスニーカーの新しく

齋

血液検査数値すれすれ

梅

発泡酒増税なんて言はないで

同

涸れたる滝に芥山積

齋

「荒ぶる」を勝利のラガー歌ひ上ぐ

昌

転がる想ひ止めて止まらず

齋

何気なく受胎告知をする少女

翠

ものみな寂びて蛇穴に入る

昌

織月に妖怪の像並ぶ道

同

看板通り旨し新蕎麦

梅

賢治の詩南部訛りで詠む女優

翠

幼のぬくみ通ふ掌

齋

花便り花のカットのある葉がき

男

羊の毛刈る牧の賑ひ

梅

連衆 鈴木了齋 岩垂景翠

中野昌子 小野芳梅

「水鏡」 坂本 孝子 捌

舞初や鶯の映せる水鏡

孝子

堤はるかに続く若菜野

健悟

味噌仕立て牡蠣の匂ひをたのしみて

有史

たまさか揃ふ一家団欒

由美子

月涼し未来都市めく副都心

節子

少年サツカー雷神をよぶ

壽子

楠にかくれて交すキス淡く

節

いとしき髪をかき上ぐる癖

史

複雑な仕事はいつも後回し

壽

地中海ゆく豪華クルーズ

悟

ハーモニカ宴の人気さらふなり

美

ゴジラゴジラと猫の呼ばるる

節

引つ越しの延びのびとなる花の雨

悟

色即是空現し世の春

節

山笑ふ村に残りし芝居小屋

壽

殺しのことを俺は知らない

史

あやとりは何故か帯になりたがり

悟

大綿虫をまとふ巫

壽

身に響く彼のハーレーダビッドソン

同

ぷりぷりの尻はたく札束

悟

長年のご愛顧を謝し町工場

美

三角屋根に月のしみ入る

壽

友きたる温め酒を先づひとつ

節

黒い噂も忘れ爽やか

史

行列は魔法映画の上映中

節

足揉みロボットけふも快調

悟

飛花落花股立掴む壬生浪士

孝

落鮎喰ひし入れ込みの客

美

連衆 佛淵健悟 荒川有史 荒川由美子

長坂節子 杉山壽子

「御慶かな」 篠原 達子 捌

高度一万機長ののぶる御慶かな 達子

七種の粥配る振袖 忠史

公園のテニスコートの和やかに かりん

小さなシャベル背にくくる犬 利子

月昇り替はりたるらし祭笛 和代

竹植うること恋のをちこち 同

我愛君オランダ坂で囁いて 同

不況とばすか巨船不審火 史

窯変の茶碗代々家宝とし 和

思考回路は固まったまま 利

携帯で動画を送る友出来て 史

車椅子にてダンスのびのび 一枝

街川に寄りては離る花筏 同

草木染干す暮遅き頃 和

経を読む白亜の廟の春の闇 史

名人戦待つ奥の大部屋 同

悪文の生原稿で校了す 同

プロンプターの嘘はなみづ 和

小松五郎筑波風を切り裂いて 史

身分違ひにいやまさる思慕 同

帯ほどきこそそそやどに居続ける 同

いつしか消えた鴟の早贄 枝

新走り知命の月を眺めつつ 達

見果てぬ夢を語る夜学士 和

買はざれば当たるわけなし宝くじ 史

警察署から感謝状くる

千年の臥竜の花に人挙り*

朱塗の重に蛤つゆの椀

*岐阜県宮村「臥竜桜」地を這う如く枝を

広げた大樹

連衆 根津忠史 登坂かりん

武村利子 長崎和代 西田一枝

「かがなべて」 島村曉巳 捌

かがなべてこの道ゆかむ初筑波 曉巳

淑気颯々松籟の韻 真呂

父と子の縁に広げる模型にて 丁那

垣の向かうでのぞく犬呼ぶ 一恵

伸びをするバイカルアザラシ夏の月 要子

水着脱ぎ捨て丸太小屋へと 珠枝

玉の緒の絶ゆるまでこそ抱くらめ 那

下駄の歯音の響く路地裏 恵

文豪の生家の跡を經巡りて 呂

へボン式にて綴る表札 那

三ツ星のシェフぞっこんのおぼんさい 恵

疏水に沿うて下る自転車 枝

祝盃に花を浮かべて真昼なり 同

鶉となりし田鼠尾を振り 那

壺打つけふこの頃の雨ぬくし 那

ホットケーキにバター溶かして 要

眠れぬ夜羊たちまで不眠症 要

だから言ったぢやないの母さん 那

襦袢市で買込んできたボロの山 呂

どうともなれと彼とふぐ鍋 恵

地方巡業座長に惚れて奈落まで 呂

啄木鳥はシャイ樹突つき継ぐ 要

フイヨルドをふりさけみれば月登る 那

楓紅葉に金髪の子と 恵

澄みし声神に届けと聖歌隊 恵

つましき膳を囲む石工ら 那

太宰府の帥も愛でけん飛花落花 巳

陽炎ゆらぐ万葉の丘 呂

連衆 木村真呂 浅賀丁那 山崎一恵

山本要子 花巻珠枝

「新宿の」 橘 朱鷺子 捌

新宿の街騒抜けて初懐紙 朱鷺子

ガラス細工に混じるぼっぺん ふみ

グライダーシンクさきまハレットに 美奈子

仔犬ともつれ笑ふこども等 たつみ

方丈に陀羅尼を誦する夏の霜 英二

簾の陰で恋のおさらひ 佳之子

不器用な直球で来るプロポーズ 奈

リングしつかり納まりし指 奈

湾岸の勝鬨橋は開かぬまま 奈

県境越える村の合併 二

薦被り割り顔見世の柁の入る 之

大名弁当舌鼓打ち 之

咲きそめし花の一枝を挿す帽子 之

翹透かせつつ舞ひ遊ぶ蝶 奈
 風光り少年兵の命消ゆ 二
 銀輪連ねアルザスの旅 二
 面細き聖像立てる森の奥 二
 寒九の水をふるまはれたり 二
 裏帳簿赤字隠しも楽ぢやない 二
 脱サラホストおぼはんはんに受け 二
 東の間の夢幻の世界漂ひて 二
 鉛の管に眠る自然薯 奈
 振り仰ぐ白山連峰月明し 二
 ほろと酔ひたる重陽の酒 二
 次々に替歌演歌唄ひ出す 二
 ミラシヨーンのタイ太目縞柄 奈
 愛用の杖に降る花長寿髻 朱
 仲良きことを賞づる青帝 之
 連衆 中村ふみ 鈴木美奈子
 山寺たつみ 日高英二 染谷佳之子

「おらが春」 豊田 好敏 捌

江戸開府四百年やおらが春 好敏
 玲瓏として浮かぶ初富士 冬乃
 ハンドベル園児が鳴らす小さき手に 千恵子
 猫の首輪にリボン結べる 泉子
 松原に突如大きな夏の月 治子
 天女の肌は羅に透け 千
 源氏名の頃を忘るる内儀振り 乃
 灯影は二つ波映る翳 泉

腕ひしぎ逆十字なる枝さえて 千
 唐草模様のちやんちゃんこ着せ 治
 特許得て商談弾む町工場 乃
 ミラノで学ぶヴィオロンのこつ 泉
 シエスタの夢に紛るる花吹雪 千
 風船揺らす風もそよそよ 乃
 鐘霞む足むくまに万歩計 治
 紙のバックの酒はすぐカラ 千
 をちこちに戦争好きナドンが出て 乃
 魔女の薬の調合が済む 千
 井戸替を憾めしげなる黒いもり 千
 夏炉の宿にはぐくみし恋 千
 釈迦牟尼はほほ笑みながら池の淵 乃
 盆狂言の人氣上々 泉
 三日月に『るるぶ』広げて城下町 治
 格子戸あけて新蕎麦を請ふ 乃
 髭と髭白さ薄さのクラス会 泉
 植木市にも景気反映 同
 無医村に赴任寿ぐ花朧 治
 雲居遙かに揚げ雲雀聞く 敏
 連衆 百武冬乃 鈴木千恵子 千
 青木泉子 加藤治子

「ことだまの」 松本 碧 捌

ことだまを迎へ和するや初懐紙 碧
 春着のひとの派手やかな帯 麻子
 羊追ふ牧羊犬は賢げに やすこ

撮影隊のジープ去りゆく 憲助
 海の家バイト終りて仰ぐ月 代々子
 冷房上げる下げるで喧嘩 美代子
 ふところの深さに惹かれ一直線 代
 御神籤大吉\$入れに秘め 麻
 パチンコに競馬麻雀へタで好き や
 癒しのブームグズいろいろ 美
 横浜の市長の若さ頼もしく 憲
 汽笛を聞けば出でて行く船 麻
 舞扇はらりと返し花の宴 憲
 薄紫にかすむ山々 代
 れんめんと江戸よりつづく義士祭 代
 地下鉄線で縦横自在に 美
 ひよいとでて凱旋門にぶつかりぬ や
 雪の尖塔ユトリロの白 麻
 水漬に胸のハンカチ差し出して 憲
 火の酒呷り狂ほしく抱く や
 老いの恋静かに深く湖色に 憲
 名月昇る定家忌の夜半 麻
 かまどうま紅旗征戎あざ笑ひ 碧
 銀のフォークを磨く新涼 代
 祖父と聴くジャズにボサノバ古き盤 美
 造形墓石魚のかたちに 憲
 花びらを掬ひて遊ぶ子ら無心 や
 風車売る法被若衆 憲
 連衆 内田麻子 池田やすこ
 吉田憲助 橋野代々子 山田美代子

「まっしぐら」 八代 嬬 捌

初雀空のふところまっしぐら 嬬

年の数より多い年玉 洋子

出航のともづなを解く棧橋に 秀樹

ストラップ揺れメール着信 久美子

黒猫のよこぎる先の月涼し 芙美

縁台将棋腕まくりして 弘子

押してみても駄目なら引けと恋指南 久

遍歴かさね四人めの彼 弘

できたてのパウムクーヘン列をなし 洋

鳴門の海の鯛は上もの 樹

ちよび髭の組長建てる供養塔 洋

掘っても出ないタイムカプセル 樹

今世紀火星に花が咲くさうな 洋

新聞記者の靴に春泥 弘

ボブサップ笑って吹いたシャボンだま ナオ 樹

「のぞみ」のダイヤ時間勝負で ナオ 芙美

世界遺産あちらこちらで名乗り上げ 久

眠れぬ霊か狐火の浮く 洋

知事さんの首もかかった民営化 芙美

紫煙くゆらす哀愁の背 弘

老婆とカンチューハイで道行を 樹

ラブミーテンダー後の裕で 弘

望の月重なる尾根をくつきりと 久

左巻きなり瓢箪の蔓 ナオ 洋

卒論は電子頭脳を頼りにし 芙美

着々進む長江のダム 久

花吹雪あびて故郷に帰去来かへりなむ 嬬

香りうれしき独活の和へ物 弘

ボブサップ：身長2m以上の黒人プロレ 弘

スラーの名前

連衆 大島洋子 青木秀樹

副島久美子 間瀬芙美 松原弘子

「目くばせも」 山口 美恵 捌

目くばせも御慶のうちや交差点 美恵

初春狂言急ぐ人波 一郎

フルコースギヤルソン皿をおもむろに 英子

ケチャップ落す真っ白のシャツ 玲

雨上がり石の鳥居の月涼し 實

汗ばんでゐる君の掌 玲

歌麿の浮世絵風に横坐り 英

若の教育係退官 玲

エーゲ海クルーズ船の水脈を曳き 郎

カーサヴィーノはロツソ辛口* 郎

一族の像の首は盗まれて 玲

株を売ったか山を売ったか 實

ポケットの小銭に混じる花の片 玲

なぜか臙な次世代IT 英

お出入りの鳶の刺青蝶の舞 郎

駄菓子屋の婆仕置請負ふ 玲

有難き説教集を拾ひ読み 實

寒猿の声響く叡山 英

冬涸れの身に余りたる恋を知り 玲

ドクターストップはいよ抱きたい 英

北東は鬼門南西裏鬼門 郎

すまぬすまぬと露払ふ墓 玲

月の原崎出の鷹と帰る道 英

CEOがふふむ酸漿* 實

鍵つ子と言はれし時代はや遠く 玲

エープリルフル騙さるる夢 英

マーブル紙漉く窓際の花明り 恵

練習曲の続く永日 實

*カーサヴィーノロツソ：ハウスワイン赤

*CEO：企業の実質責任者

連衆 古賀一郎 佐古英子

日高玲 梅田實

募吟！

発句コーナー新設

講評「繪硝子」主宰和田 順子氏

兼題 短夜 冷酒

切 五月末日

発表 五二号（七月十五日発行）

送り先 ①15510033

世田谷区代田3・19・8

FAX03・5486・9751

ねこみの通信編集日高 英二

芭蕉の献立

原田 千町

曾てACC(朝日カルチャーセンター)が水曜日にあった頃のある一時期、明雅先生はその帰路の夕食に必ず鰻を召し上がられた。私もお供の端に加えて頂き、それ以来、月に一度位は鰻を食べたくなる。鰻は家持の「むなぎとり召せ」とあるほどの古くからあるごく庶民的な食材だが、芭蕉翁は鰻を食べたであろうか、深川辺りなら入手は容易であっただろうが、素人では調理がかなり難しく一般的ではなかったと思われる。因に江戸では安永、天明(1764~72)のころに初めて府内に鰻屋が出来たとされる。翁の句の中に、鰻はみあたらないようだ。見られるのは、餅、飯、麵、芋、葱、瓜、茄子等の野菜、魚は白魚、鮎、鮎位で蒟蒻が好物だったようだ。

蒟蒻のさしみもすこし梅の花

天和元年(1681)三十八歳の時に、老杜にまされるものは、独多病のみ：自ら乞食の翁と呼ぶ、とあり今ならまだまだの若さなのだ、体質的にも淡白な物の他はあまり受け入れられなかったのではないだろうか。

あさがほに我は飯くふおとこ哉

晩年、おくの細道。で金沢に滞在した際に、弟子の小春は裕福でもあつたらしく、及ぶ限りの珍珠佳肴でもてなした。「ここに風雅のさびしきなしといはんか」と云われてしまう。その数日のちの別の俳席で翁の方から茶漬を所望し、あまりに行き届かぬ事を恥じる亭主に、これが一番心置きのうてようござる「すべて酒食の奢に隙を費して俳諧の味を忘れるのは、遊里戯場の物好きであつて、風雅の席には無気なことである」と語つたと云う。「俳諧遺墨」にも「飴食飴茶あるにまかせよ」とあり、利休の「食ハ飢ぬ程にて足る事なり」に通じる。

芭蕉と同時代でいろいろな意味で両極をなす西鶴は、延宝八年(1689)三十九歳、生玉神社で大矢数一日一夜四千句の興行をしている、驚くべき気力体力である。美食家でもあつたらしく、美食談もその作品に幾つか見られる。真贋定かでないと言われるが、「萬の文反古」の中に「来る十九日栄耀献立」があり、そこには、鯛と青鰻の杉焼き、と云うものがでてくる。その頃は鰻や朱鰻さえも食したらしい。鮎、海老、鱸、蜘蛛腹の鱈の白子はよいとして、燕窩、燕の巣さえも登場するのだ。当時は現代より更に高価な品だっただろう、自身で「さりとて町人の振舞には奢りたる事なり」と云っている。

翁には「八月十五夜 月見の献立」が伊賀上野に残されている(個人蔵)。これは元禄七

年実家の裏庭に無名庵を建ててくれた門人達を招き、渡座の祝いを兼ねて、月見の宴を催した折の翁自筆の会席料理の献立である。奉書に薄墨で右に花、左に竹の下絵も描かれている。このとき大津の女流俳人智月より贈られた麩と南蛮酒が出されたようだが、南蛮酒とはひよつとして葡萄酒なのだろうか、献立にはただ「酒」とあるのみ。山野の物が多く素朴な精進である。その一つ、のつぺいせうが、麩、蒟蒻、牛蒡、木耳、里芋とあり、これらを煮て葛を引き生姜汁を落としたものである。素朴でいかにも美味しそう。他は煮、吸物、肴とあるがこれもむろん野菜で、酢の物、菓子柿などである。これらの料理は普請の時の残りの杉板に松・竹・梅・栗・桐の墨絵を翁自ら描いた板膳に盛られたという。この心遣いこそが最高のもてなしというべきなのであろう。

食はほどほどの滋養と楽しみも欲しいものだが、グルメ全盛の現代に、二つの献立はいろいろ考えさせられる。私は少食なのだが元々が食いしん坊なので、とかく食に目が行ってしまうのである。

私の連句入門

倉本 路子

連句って何だろう：何の予備知識もないまま私が朝日カルチャーセンターの「連句入門」の門を叩いたのは平成二年四月であった。颯爽と入って来られた先生は、お背が高く背広姿のなんとダンディーなこと、連句の宗匠

発、死線をさまざめた。幸い半年後この世に舞い戻り体力の回復を待って連句入門教室へ入られて貰った。連句を教えて頂いて本当によかったと感謝している。森羅万象を詠む連句の世界でいろいろの事を教わった。すばらしい沢山の友人にも恵まれ、老後を生き生きと過させて貰っている。有難いことである。

という古色蒼然たる世界を想像していた私は息を飲んだ。でも何となくお優しそうだなど思ったのが第一印象であった。そのうち夫人共々熊本の御出身と知って、私ごときが恐縮であるが、同郷の誼の様なものを感じぐっと身近な方に思えたから不思議である。教室では更に驚いたことがある。木曜会（朝日カルチャー第一回加藤楸邨俳句教室の修了者の会）のメンバーが何人もいて、その上実作指導の先生が秋元正江様であったことだ。昭和四十九年新宿に開設された朝日カルチャーの楸邨教室からは俳誌「寒雷」に沢山参加したが、秋元様は恵まれた才能を發揮して平成二年早くも同人に推挙された。しかし発表当日の寒雷大会へは何故か欠席。ずーつと後で知ったのだが、その日は連句が初めて参加した松山での第五回国民文化祭の日にあたっていたのだそうだ。

連句教室に入った頃、明雅先生は大学の授業のような講義をなさっていた。学問的な解説のプリントを毎時間配って下さったし、席の順に指名して質問もなさった。順番が来た時答が解らず私は思わず「パス」と言ってしまった。先生は「エエッ！パス？」と身乗り出し大袈裟に驚いたふりをなさった。「スミマセン」と言ったが、先生の俳諧師としての洒脱な一面を見せて頂けたような気がした。又、連句とは五七五の句が連なっているのかぐらいに考えていた私は質問した。

連句入門講座が始った昭和五十六年頃私は体調がすぐれず、翌年ひどい吐血をして胃の全剔出手術を受けた。その後腸閉塞を十回も繰り返して遂に腸が破れて腹膜炎や敗血症を併

「先生、これは連歌ではないのですか。」
「そうです。俳諧の連歌と言います。」
「どうだい、面白いかい。」
と、後の席に控えていた杉内徒司様が声をかけて下さった。
「何だかピンと来ません。」
と、私。

「そうかい三年我慢すれば面白くなるよ。」との御託宣。

「ヘエー三年も！」

と、思ったのに、半年もしない内にのめり込んでしまった。

その後芭蕉記念館での句座の戻りに喫茶店でK先生の想い出話を伺うチャンスがあった。「明雅先生は教授会でも私共後輩を可愛がって下さり、僕が矢面に立つから何でも発言しなさい」と自由に意見を言わせて下さいました。又あの頃の信州大学は学生運動の嵐が吹き荒れていて、ある時刑事事ロンボの様ながら毅然として説得に向われた後姿は忘れられませんか。」

と、言う様な話であった。私も折にふれて先生のことを「肥後もっこす」と感じることもあるが、本当に芯の強い男っぽい方なんだなあとと思った。

秋元正江先生が、

「明雅先生は御夫妻とも、とても立派な方です。私は人生でこんな立派な先生にお逢い出来たことを本当に感謝しているの。」

と、しみじみおっしゃった事がある。私もそう思う。弟子どもは皆そう思っているに違いない。当代連句の第一人者、学識実力共に日本一の明雅先生、これからどうぞよろしくお願ひ申し上げます。猫養会長を退かれ、これからは気楽にお元気で、白寿はおるか茶寿・珍寿までも長生きなさって下さい。教えて頂きたいことがまだ山程ございます。

「芭蕉忌正式俳諧興行」にいきました。
時雨忌の石の蛙は歌はざる

俳句結社『麻』同人 田中 幸雪

俳句結社誌『麻』に毎月連載している「俳誌展望」というコーナーがある。これは色々な俳句結社誌を毎月一〜二冊ずつ取り上げ、は評論を加えていく頁なのである。ここ二年ほどその頁を私が受け持っていて書いている。

『麻』では公式に連句を扱っていないが、ほかの結社誌を見ていると時々、連句の頁を見かけるのだった。さすがに芭蕉の時代とは違つて、内容は軽やかで現代的な感じのものが多く、聞く所によると、連句はその場で人の句に反応して作るらしい。席題みたいな感じかな？もしかして即吟の訓練になるのではなどと、単純に考えてしまった私。興味津々となり、連句の会を一度見学してみたいなどと呟いたところ、早速、鈴木了齋氏、春名青卯氏（麻会員）から反応があった。鈴木了齋氏は麻会員であるが同時に連句の大手結社『猫蓑』会員でもあられる。了齋氏のお口添えにより『猫蓑』の年に四回の大きな大会のうちの一つ、「芭蕉忌正式（しようしき）俳諧興行」の際に行われる連句会に押しかけゲストとして、青卯氏とともに連れて行ってもらうことになったのである。持ち物は十七季（連句の歳時記のようなものか？）という小さな

本と大学ノートと短冊ということで私はこの十七季をインターネット本屋で取り寄せその日を持ったのである。

一日体験ということで私はおっかなびつくりではあるが十月十六日の水曜日、出席しなければならぬあすなる俳句教室をひそかにサボって連句の会に潜入したのであった。

ところが、どうも朝からけちがついた。芭蕉記念館なら吟行で行ったこともあり、頭には地図が入っていた。しかし、地下鉄を出てきたら空の明るさに目がくらんで、反対方向に歩いていってしまったのだ。旅人とわが名呼ばれん初時雨…。

というようなことがありながら、ともかく芭蕉記念館に着くと、続々と連句のご連衆と思しき方々が集まりはじめた。紋付袴、いかにも着物着慣れた女性も目に付き、ただものの集団ではないことがシロートの私にもうすうすと理解できたのであった。

今日は一般的な連句の会の前にイベントとして『芭蕉忌正式俳諧興行』が行われた。空手と言えば型の演技というようなことである。古い文献を研究の結果、復元したものだそう。

宗匠役は原田千町氏、『未来図』同人でもあられるが実際に連句の宗匠としても立機されている方である。他に数名の方々が上座の方にそれぞれの役割を持ってずらりと横並びに坐らされている。

まことに総合芸術なのである。雅楽のテーパー流され、花をいけ、香を焚き、作法にのつとつて、挨拶が恭しく交わされ、重ねた硯箱配るのも作法の内である。

中でも文台捌き、文台返しという一連の作法には茶道のお点前にも通じるような一定の動きがある。執筆といつてこの連句がつつがなく巻き終わるようにする進行役が肅々と行うものである。連句を書き込むための和紙は奉書紙のようなもので比較的厚手で折りたたんでも結構大きめな懐紙とよばれるものである。表（オ）、裏（ウ）、などと連句の上に小さく書かれている字はその折りたたみ作業に由来するものなのだ。折りたたんだ懐紙の表裏に句を書きあげ、読み上げたあと、キリで静々と穴をあけ、それを綴じる為には金銀の水引が使われる。最終的に一つの冊子をつくりあげるのである。

本日はエキシビジョンマツチのようなことなので全ては台本通りである。よくきく言葉で「歌仙」というのは三十六歌仙に由来する呼び方で三十六句で一巻になっているものだが、今回は二十句で一巻の「二十韻」というやりかたである。一巻の巻き方にも色々な句数、やり方、構成があるようだ。

今日はその二十韻の内の最初の十句については懐紙の表にすでに書き込まれても居るようだった。

表裏の最後の句を読み終わると、連衆の中

のあでやかな着物の女性が「つけ。」と手をあげる。静々と前に進み短冊を執筆に差し出す。短冊は執筆から宗匠、脇宗匠、副宗匠、の三人の手を順繰りに回ってまたもどつてくる。時々うなずきあったり、しておられるところを見ると多分ここで句が捌かれたということなのだろう。その段階で執筆が声張り上げて、「句あり。」と短冊を句と認め披露して膝の上で筆でさらさらと、懐紙に書き込む。(真似をする) そうやって交互に連衆が出て行つて句をつけあうのである。出来上がった一巻を床の間に飾られた芭蕉像に奉納し硯の回収もすませ、宗匠方が席を立てば、つつがなく今日の「芭蕉忌正式俳諧興行」は終了したのであった。

そうしてこれから今日の主なる眼目、連句の会が始まるのである。ドキドキそわそわ。知る人としてなくよるべき身である。すでに会場にいくつかのテーブルが島のように並べられ、あらかじめ決められたグループの名前の書かれた席につくことになる。なだ万特製六角弁当と箱入りの和菓子セットが配られる。本来連句と言うものは食事しながら飲みながら楽しくにぎやかにやるものなのだそうだが、どうぞ召し上がれと言われているのを通るものではない。

ベテランの捌き手の日高英二氏と今日の宗匠役を勤められた原田千町氏の間に私の席は定められた。どきどきしながら、それでも私

はまだ軽く考えていたのだった。発句は日高氏が出句された。

石彫りの蛙も鳴けよ初しぐれ 英二
これが発句というものか。これに寄り添うように付け句をするのか……。ほほう。

しかし、付け句が七七だから悩む。そして連句が進むにつれ、悩みはますます大きく具体化していったのであった。要するに私の中には七七と言うフレーズがないということ。短句ができなくても俳句やっているのだから長句のほうはお得意でしょう、とふられても雑(ぞう)といつて、五七五なのに季語をつかわない句も必要なので、季語のない五七五というフレーズも持っていないということにも気付かされたのだった。日頃どれだけ季語に寄りかかってお世話になっているか思い知らされたのであった。

それも自分勝手に作るのではなく、その場の雰囲気、前に出た二句くらいに反応するように寄り添うように、また余韻を残しながら変化していくように、その上式目(ルール)にのっとつて作らなければならないのだ。

また、俳句の世界ではそういうわけ方はないのだが、バラエティ豊かにするためにも自、他、場、と色分けしなくてはならないらしい。それから季節の区切りが細やかだ。四季に四つずつの区切りがあり、新年を加えて十七季というわけか。なるほど。

少しづつ間抜けた句は出すものなのなども

その座の雰囲気に乗っていけず、流れを壊してしまふのだ。付き過ぎ、構え過ぎ、はなれすぎ。転じるといつてもその頃合が理解できない。

でも今回のやり方では全員が公平に句を出さなくてはいけないので次は夏の月でお願いします、そろそろ恋の句出してもいいんですよ、といわれるが、恋の句?虚構でいいって言ったって、そんなーとテレまくるばかり。

できなければみんなが智恵を出し合つて式目にあうように直してもくれる。だが曲がりなりにも俳句人、席題ができなかったことなど一回だつてありませんでしたとも。という私の自負はもろくも崩れ去つたのであった。

しまいには人の作つた句をそっくり私がつたことにしていたときに最高潮に惨めな気分。最終的にわたしは自分を石地藏であると認定したのであった。

『猫養』のご連衆はお心が広く、ご親切に二次会に挫折感でいっぱい私達をお誘いくださいました。そこに図図しく参加したところ酒の席でまた連句の付け合いがはじまつた。俳句の会でも二次会で箸袋に出句ということもあるのですが、連句のご連衆もまたそういうところろに共通点があるのだなと妙に納得したりして。本日のご厚情に感謝しつつも心の片隅に呟く一言。いつか、リベンジを……。と。

時雨忌の石の蛙は歌はざる

『麻』平成十五年二月号より加筆転載

連句私論

—現代の俳諧を求めて—

青島 ゆみを

一つの基準

ある時明雅先生が初心者に「執筆は差し合
い、宗匠は文学」と教えられた。式目は執筆
の役柄であつて、一卷の文学的責任は宗匠に
あるといふのである。現代の連句の興行では、
この仕事は「捌き手」に委ねられていて、連
句は捌きの文学などといわれる。それはその
とうりだとしても、捌き手が作品をその好み
に合わせて作りあげることではない。俳諧は、
同時に、座の文芸であつて、連衆の存在とそ
の満足とがなければ、成り立ちえない。この
ことは、オーケストラの音楽に似ている。
かつて、ベルリンフィルを率いたカラヤンは、
楽団員のいずれもが自分の音楽をやつたとい
う満足感が引き出せればよい、といった。座
の文芸である連句も、連衆が参加したことを
喜びと思へた時、その捌きとの一卷は意味が
あるといえる。連衆の意思をひん曲げるのが
捌き手の役割ではない。連衆が発想したもの
に最大限の意味を見いだすことが捌き手の役
割であり、カラヤンの指揮であることが大切
である。

故式田和子宗匠は座を大事にされた。¹⁾

のなき鬼」の巻はよい例ではないか。猫養錚々
の男連衆を捌いておられる。興にのつた連衆、

ナオ一 こんなときどうする百のおばあさま

二 お岩木山のちっさまに聞け

和子宗匠どうするのですか、明雅先生にき
けだとき、といつていろいろ。

このことを評価基準にするのは、実は、至
難のことである。それでも、できるかぎりこ
の座の意味を読み取つてみたい。それが第一
の基準である。

次に考えるべきことが、明雅先生が教えら
れる連句の四項である。①一句のしをり、②
付け、③転じ、④序破急の構成、のことだ。
このことの中に、古来から蕉風として守り継
がれてきた式目のことが入る。わたしは自ら
を旧守派と称することにしているが、できる
だけ伝統に従いたいのである。もちろん、十
全ではないが、それへの目配りは大切である
と考えている。これが第二の基準である。猫
養の諸先輩には何を今更であろう。

俳諧連歌の伝統にたつ現代連句は、ここま
でに上げた基準に従つていけばよいのだろう
か。すさびごととするなら、それはそれでよ
い。芭蕉は、自分の語るものが人の心に触れ
て、喜びや悲しみとなることの意味に気づき、
その一筋に賭けようとした。そのことは無常

の乾坤を切り取ることであつて、今の世界を
描くことの中に、文学の本質を見いだしてい
たように思う。「炭俵」の「むめがかに」の巻
から、

ナオ七 門しめてだまってねたる面白さ

八 ひろうた金で表がへする

九 はつ午に女房のおやこ振舞て

十 又このはるも済ぬ牢人

ナオの七から十は、コンテンパラリーの人
間である。「又このはるも」と詠んだ野坡の目
に芭蕉は「今」の世を感じたのである。芭蕉
も、人を詠み、この世を詠み、それを投げ出
すようにして作品に結晶させた。それは具象
の中に人間を詠むことであつた。乾坤の実相
は、いうに易く、詠むに難しいことである。
この切り口がなかつたなら、そもそもわれわ
れの連句は何なのであろうか。

先の歌仙の中にも、

ウ 五 宅配で送るクラブと双眼鏡

六 縮ステテコいつも離さぬ

七 血吸蛭漢方店に弦の月

八 香港市場株値低迷

九 雀荘でツキ始めた酒頼み

とある。ゴルフの合理化、縮のステテコ愛
好家、鬱血症、世界の株の下落、そして、宗

匠も愛したマージャン狂。どれも現代の世態である。

実は、文学はこのことに係わっているものであって、現代詩でもある連句は、この面からもしつかり鍛えられねばなるまい。

故和子宗匠の疑問

猫養集十一の巻頭の歌仙「秋うらら」の巻から、二箇所を上げてみる。

折端 今川焼の熱々を抱き 健悟

ウ折立 蔵入りの杜氏集る振舞に 英二

二 金も命も女に握られ 明雅

ナ才五 あの頃はオカマオカマと罵られ 健悟

六 水の鏡に身を投げる鬼 玲

七 雌河童連日連夜攻めよせて 明雅

明雅先生の捌かれた一巻である。合評によると、膝送りだったとある。この合評がなかなか面白く、今は亡き和子宗匠が明雅先生に迫っているところがある。

和子 細かいことを言ってもしょうがないんですが、先生この一巻は頑張っているらしいですね。

明雅 何が(笑)。

和子 面白くしようとする努力がこちらからに見えますから。

明雅 いやいやいや、そういう下心はありませんよ(笑)。

和子 ないんですか。

明雅 うん、ない。これには作者名を書い
てないからお分かりにならないと思う
けどこれは膝送りなんです。だからね、
一人で私が頑張ったってできない。

このやりとりのハイライトがここに上げた
ような箇所だと考えられる。このお二人のや
りとりで先立って、和子宗匠が述べておられ
ることがある。

和子 この頃思いますのは、皆様連句がお
上手になって、もともと面白くも
のをという方向に動いているように感
じます。これからの連句が面白けれ
ばそれでいいのかということ、真面
目でもなおかつ面白いということがで
きるのかどうか、そのところを考えて
みたいと思います。

この指摘とお二人のやりとりを読んで、ど
うも明雅先生は図星を指されたらしいと感じ
る。和子宗匠の「真面目でもなおかつ面白い
もの」という問題提起は、現代の連句への警
告なのではないか。「真面目で面白い」は現代
連句のキーワードである。

わたしの読み

「秋うらら」の巻は面白い。付句を読むと

連衆の人柄が髣髴としてくる。連句のよさに
溢れていて、現代にも目配りがされている。
幾分教養や蘊蓄がありすぎるように感じる、
だが、連句とはそもそも連想や想像力に支え
られて成り立つ詩作品でもある、このように
丁々発止とやり取りしている座は楽しい。

わたしが上げたのは、どちらも先生の恋句
への転じである。今川焼から杜氏への振舞
へは自然な流れ。ところが、杜氏が出てきた
ことから、恋の気配があれば恋を付ける、の
典型とばかりに明雅流恋句が出てきた。杜氏
がそんなに女に弱いわけではないが、出稼ぎの
人にあるやくざな性格は否めない。そこをす
かさずに、首根っこを抑えられた男にしてし
まったのは、和子宗匠ならずとも、「先生やっ
た」と叫びたくなる。

次の「雌河童」は、合評の中では恋句では
ない、とおっしゃっている。確かに、「オカマ」
の付句からナルシスの身投げに至るところを
恋とすれば、既に恋は二句であって、先生は
怪奇をもって「恋離れ」をされたのかもしれ
ない。しかし、この句には女に追いかけられ
る男の姿があり、ナルシスが水の鏡に見入ら
れて、そこに身を投げたのももともとと思わ
せる。ここにも、かなり意識して連句を面白
くしている姿勢がある。あるいは、連句の付
けと転じはこのように面白くやるものだと教
えておられるのかもしれない。

和子宗匠の問題提起となった所以である。

時雨忌興行から

座の文芸が文字通り実践される場としての猫養例会は、貴重なものを見せてくれる。座であるが故のやりとり、面白さと現代への目配り、作品作品と目くらをたてないだけ、連句のよさが出ているのではないか。

ウ二 宅配便で届く松茸

三 傷つくを恐れて恋の出来ぬ秋

四 遂にお前も姉さん女房

五 入れます八十歳まで保険には

「桃青忌」(内田麻子捌)から抜かせて頂いた。松茸が届けられ、自尊心のある人の様子が詠まれたと見る。そんなこといつたって、あんたも姉さん女房になっちまったじゃないの、といくらか座でのからかいといった口調。ええ、ええ、八十歳までだって保険がかけられるんでね、とやり返した、そんな雰囲気。勿論、姉さん女房だって保険を手でできますわよ、というのであろう。ここの詠み手を考えるにつけ、この座のやりとりが秀逸に楽しいものに思えてくる。

付合も気がきいていて、わたしは、このよな座でなければ生れてこないよな付合をやってみたいと思う。座の文芸は、座が弾まなければ、そもそも座っているのがつまらな

い。付けや転じの技巧を包み込むようにして、巧みにやり取りすることで、座の誰もが満足を感じる。

「虚栗」の歌仙「花にうき世」のウの折端とナオの折立は、嵐雪と師匠芭蕉の掛け合いである。

折端 破―蕉誤ツテ詩の上を次ぐ 嵐雪
折立 朝鮮に西瓜ヲ送ル遥ナリ 芭蕉

嵐雪の前句は、嵐蘭の「化しの棺を出て草の月」であった。その出た精を破れ芭蕉だとして、次韻をすべき詩で上句を次いでしまった、と付けた。次の付の師匠芭蕉に、そんな戯れをして、先生うまく捌いてください、といった。そこで、この詩の贈答を朝鮮使節史との間のことだとして、西瓜の詩を贈るべきところを、間違つて破れ芭蕉の詩を贈ってしまったと、戯れを返した。師匠の楽しそうなやりとりである。

このような座の声が聞えてくるようなものを読む時、連句は一層楽しく素晴らしい。

ナオ すぐに埃の浮かぶ仏壇
ナオ 対性原理にならふ蝸牛

タンゴ華麗に薔薇照らす月
逢ひにくる彼ロボットの歩き方
酒が入れば猛獣となる

「立冬」(上月淳子捌)から抜かせて頂いた。埃の浮かぶ仏壇とは、その存在を忘れ、実は故人が忘れられがちだというのである。対性原理にどのように従うのか、ともあれこの蝸牛は現代的である。ここには核などを弄る中近東が見えたのか。突如として、タンゴが響き、薔薇に月が差す。そこに男ロボットが逢いに来た。あの踊るような歩き方で、というのは、そんな彼がやって来た。そんな滑稽な男が、アルコールで変身。

この流れを読んでいて、書かれた文字以上に、現代の生きている時代が隠されているように感じられる。人の心の移ろいと価値多様の世界の姿、あるいは、ひよつとしたら恋人になるかもしれないロボット。すでにペットにするというから、恋人へ、そして、猛獣への変身が起こるかもしれぬ。このような現代を喜んでよいのか。笑いの中に提示されたことの中に、現代のわれわれのエゴも見えてくる。俳諧の具象の象徴性が出てきたように思うのである。

了

事務局便り

◇下鉢清子氏の立机
下鉢清子氏は四月十三日、柏市光ヶ丘近隣センターで立机され、主宰より「貝母亭」の庵号を授与されました。詳細は次号に。

◇会員計報

今宮水壺氏は二月十八日御逝去されました。
法名 雄譽叡水信士
謹んでご冥福をお祈りいたします。

◇猫養会総会および七月例会

日時 平成十五年七月十七日(水)

十一時より(受付開始 十時半)

場所 芭蕉記念館

江東区常盤一・六・三

電話 03(3631)1448

総会終了後、歌仙興行。

◇猫養同人会総会

日時 平成十五年六月十五日(日)

十時半より(受付開始 十時)

場所 清澄庭園 大正記念館

江東区清澄三・三・九

電話 03(3641)5892

総会終了後、歌仙興行。

◇猫養会・平成十五年度運営体制

名誉会長 東 明雅先生

会長 青木 秀樹

副会長 佛淵 健悟

理事 島村 暁巳(会計)

同 松本 碧(事務局)

同 梅田 利子(作品集)

同 橋 朱鷺子(連句教室)

同 日高 英二(猫養通信)

監事 近藤 守男

同 倉本 路子

なお、各理事のもとに若干名の運営委員を置き、実務上のサポートをお願いします。(詳細は七月号に)

◇猫養会新会員紹介

黒川 裕美子、高橋 武彦、山田 哲夫、

風間 克子

◇猫養同人会推挙

式田 恭子、井上 鶴鳴、難波 さえ子、

松原 弘子、梅田 實

◇住所変更

倉本 路子

〒161-0033

新宿区下落合四・九・三四・三二三

電話 03(3953)8797

佐々木 有子(同右)

◇猫養会名簿

平成十五年度の猫養会名簿を作成中です。

住所変更や訂正が必要な方は、左記にご連絡ください。

電話・FAX045(544)6770

事務局 松本 碧

◇『猫養作品集13号』完成

一冊二千元。部数に限りがありますので早めにお申し込みください。

〒277-0051 柏市加賀二・十一・十一

電話・FAX047(172)8119

梅田 利子

◇会費納入のお願い

猫養会の平成十五年度年会費納入をお願いします。

・四月と七月の例会時に受付で申し受けま

す。

・例会に出席できない方は左記口座にお振

込みください。

(猫養会)

みずほ銀行新宿新都心支店

普通預金 3376088

◆猫養発展基金にご協力有難うございました。

引地 冬樹様 一万円

(猫養発展基金)

みずほ銀行新宿新都心支店

普通預金 3376045

